ISSN 1344-5642

図書館報

— Seinan Toshokan pou —

2026.
April
No.199



ブックレビュー 新入生に一押しの1冊

1 ことばとともに生きる
図書館長　加藤 洋介

2 ブックレビュー
『20の古典で読み解く世界史』
ラーニングサポートセンター長 経済学部 経済学科 教授
花田 洋一郎
『すぐに実践したくなる すごく使える睡眠学テクニック』
学術支援部 図書情報課　翁長 諒磨
『ネガティブ・ケイパビリティ:答えの出ない事態に耐える力』
人間科学部 心理学科3年　半田 乃音
『流浪の月』
国際文化学部 国際文化学科 2年　中村 心奏

3 世界の図書館
釜山大学図書館
国際文化学部 国際文化学科 教授　尹 芝惠

4 ブラウジングルーム
「税とはどんなものかしら」
法学部 法律学科 准教授　住永 佳奈

News
本でつながる大学生×高校生
図書館学生団体 LILA

5 蔵書ギャラリー no.39
『日本誌』Histoire naturelle, civile, et ecclesiastique de l'Empire du Japon
西南学院大学博物館 学芸研究員
鬼束 芽依

SEINAN GAKUIN UNIVERSITY

ことばとともに生きる

図書館長 加藤 洋介

研究者はときどき時代錯誤ということばをつかいます。たとえば『源氏物語』は英語圏でしばしば日本のnovelとして紹介されますが、novelは近代に形成された文学の形式であり、その概念のなかった時代の作品に適用することは時代錯誤です。18世紀のイギリスで生きた思想家エドマンド・バークについて、保守主義の父という表現で一般に解説されますが、保守主義はイギリスでは19世紀にあらわれた語です。自由主義も同じころにあらわれた語、概念であり、17世紀のジョン・ロックを自由主義の思想家とよぶことも同様に時代錯誤の例です。

こうした用法は必ずしも悪いわけでなく、むしろ理解を深めることもあり、是非を単純に問えませんが、これらの事例からわたしたちが後代につくられた概念や枠組みを通して過去を解釈することがよくわかります。エドマンド・バークは生前に保守主義の思想家だったというよりも、没後にあらわれた保守主義の思想の流れにとり込まれ、その記述に収められました。

このように1つの語があらわれる前と後の時代を区別し、論じることは比較的容易ですが、語がその意味を根本的に変えたとき、その扱いはとてもむずかしくなります。語彙研究の大家であるレイモンド・ウィリアムズが言うように、意味の変化はたいてい形の変化を伴わないため、「ときにほとんど気づかれない」※1からです。ウィリアムズが最もむずかしい語の1つだと認めるnatureを例として説明しましょう。

natural historyという英語の表現があります。一般に自然史と翻訳され、ロンドン自然史博物館が固有名詞として日本で定着している通りですが、それが英語の意味を適切に伝えないという事情があり、博物学という訳語もよくつかわれます。が、natureは19世紀の半ばに進化論と強く結びつき、変化する世界を含意しました。natural historyは広く進化の歴史をあらわすようになりましたが、この変化をわたしたちはふつう意識しません。ついでに言うと、19世紀のイギリスで隆盛した文学運動のNaturalismを自然主義と翻訳しますが、通常は進化論の影響を受けた文学運動のことです。

ウィリアムズが語るように、語の意味は本質的に辞書の定義よりももっと複雑で流動的なものです。※2その意味変化はわたしたちがふつう想像するよりももっと広く、もっと日常的に起きていますが、わたしたちは意味を固定することを好み、変化にあまり関心を向けません。それでもそれに細心の注意を払うことを求められる職業があります。上記から推察されるように、翻訳者です。

たとえばan ethnic groupという表現を翻訳する場合を考えます。現代英語であれば民族集団をあらわしますが、18世紀前半の英語ではまだethnicは民族の意味をもちません。異教徒をあらわす語でした。翻訳者にとってこの変化は重要で、そのころのテクストであれば異教徒の集団と翻訳することになります。AI翻訳の台頭によって翻訳者の仕事は軽視されるようになりましたが、翻訳はときにこうした教養や学識と結びつく知的営為です。歴史を見ると、洋の東西を問わず、学者がすぐれた翻訳者であり、翻訳者がすぐれた学者だった時期は数多くあります。


THE MYSTERY OF THE RUE DU POT-DE-FER

A TRUE STORY, TOLD FROM THE LETTERS OF MADEMOISELLE AISSE.

By F. Hayford Harrison.

PART I.—THE INVALID IN WHITE.

JEAN FRANÇOIS ISEZ, the famous surgeon, had retired to his apartments after a professional round, and had hardly begun to eat the dinner

cobbles, they sounded loud in the silent street, and they saw no living creature save a few dogs and cats prowling about and sniffing at the heaps of refuse thrown to the road.

But when they had proceeded about half the length of the wall, they became aware

『ストランド誌』第3巻（1892年）（復刻版）から。
物語の冒頭、差出人不明の手紙の記述がミステリーをもち込む。

natureが進化論の連想を喚起したころの英語の意味変化に話を戻しましょう。前述の変化と関連してmysteryという語も意味を大きく変えました。mysteryも長い歴史をもつ語であり、もともと人智を超えた神秘をあらわし、19世紀初頭にイギリスでゴシック小説が流行したころまでそれが主要な意味でした。有名なゴシック小説である『フランケンシュタイン』では神が創造した世界の神秘をあらわします。『フランケンシュタイン』の物語はどんなすぐれた科学者でも世界を完全には解き明かせないことを前提として組み立てられています。しかし、その後、科学がさまざまな領域で自然界の法則を発見し（進化の法則はその1つです）、人びとの期待を集めるようになり、その結果、mysteryはしだいに形而上学的意味を離れ、人が解き明かすことのできる謎を意味するようになりました。19世紀末、作家たちがその新しい意味に注目し、謎を解くという趣向の物語を量産しました。図版はその例です。なかでも異彩を放ったのがコナン・ドイルのシャーロック・ホームズの物語で、この語の新しい意味の普及に貢献しました。

「たいしたミステリーのない事件だね」ついでやった紅茶を受けとりながら、彼は言った。「事実から考えられることはたった1つだ」「なんだって、もう解き明かしたのか」※3

『フランケンシュタイン』の時代から1世紀ほどのあいだにこのように神秘の意味が後退し、謎の意味が前景にあらわれました。同時代の読者はこの語に新しい響きを感じとりながら物語を楽しんだと思われます。

いくつかの語をとり上げ、語彙研究のほんの一部を紹介しましたが、ことばの意味が複雑で流動的であることを瞥見できます。ことばの世界の魅力にあらためて気づかされます。

※1 Raymond Williams, *Keywords* (Fontana, 1976) p. 17.
※2 Ibid., p. 17.
※3 Arthur Conan Doyle, *The Sign of Four* (Penguin, 2001) p. 19.

ブックレビュー 新入生に イチ押しの1冊

『20の古典で読み解く世界史』



本村凌二著 PHP出版 2021年
(6階B:通常書架 902/0/133B)
ラーニングサポートセンター長 経済学部 経済学科 教授
花田 洋一郎

人類が誇る代表的な古典文学と世界史を同時に学ぶことができたらどんなに楽しいかいつも思っていた。ローマ史の大家が本書を出版したときにすぐに飛びついた。『イリアス』『オデュッセイア』、『史記』、『神曲』、『ドン・キホーテ』、『アラビアンナイト』、『ハムレット』、『ファウスト』、『ゴリオ爺さん』、『大いなる遺産』、『戦争と平和』、『カラマーゾフの兄弟』、『阿Q正伝』など20作品が取り上げられている。内容は簡潔にまとめられ作品が書かれた時代背景、民族・宗教・文化にまで話は広がる。古典作品に出てくる登場人物にはかなりやばい奴がいることに驚愕することも。人生をもう一度やり直そうと悪魔メフィストフェレスと契約するも過ちをおかすファウスト、誇大妄想にとりつかれて奇行を繰り返すドン・キホーテ、ベアトリーチェに一方的に恋慕し地獄・煉獄・天国巡りの果てに出会うことを夢想したダンテ、逆玉の輿に乗ることこそ出世の近道と信じるラスティニャック、ナポレオン戦争のさなかで人生の意味を苦しみながら模索するピエール、アンドレイ、ニコライ、そしてナターシャ。古典文学作品と世界史を学べて、なおかつ人間とは何か、人生とは何か、教えてくれるタイパ・コスパに優れた1冊。

『すぐに実践したくなる すごく使える睡眠学テクニック』



櫻井武著 日本実業出版社 2024年
(5階C:通常書架 491/371/389)
学術支援部 図書情報課
翁長 諒磨

突然ですが、皆さんは最近よく眠れていますか？授業にアルバイト、部活動・サークルなどなど・・・忙しい日々を過ごす皆さんが、心身ともに健康であるために、睡眠が大事な時間であることは間違いないでしょう。しかし、睡眠について学ぶ機会はそう多くはないのかもしれません。そこで、睡眠について正しく理解し、自分に適した睡眠をとることで、充実した毎日を送って欲しいと思い、本書をオススメします。

本書では、睡眠に関する驚きの事実が次々と紹介されています。例えば、「早寝早起き＝体に良いは嘘」「眠気覚ましのコーヒーはアイスよりもホットが効果的」など。これだけでも興味をそそられる内容ですが、私が最も衝撃を受けたのは、「朝型・夜型は遺伝子の組み合わせで生まれつき決まっている」との事実です。朝型、つまり早寝早起きが良いと幼少期から刷り込まれ、朝型に近づこうと早寝早起きを意識してきた夜型の私は、思わず早寝早起きを諦めたくなりました。

著者の櫻井先生は、「オレキシン」という睡眠と覚醒の切り替えに重要な働きをする物質を発見した研究者として知られており、科学的な根拠に基づきながらも分かりやすく解説されているため、納得感をもって読み進めることができます。本書をきっかけに、自分に合う睡眠習慣を探してみてはいかがでしょうか。

『ネガティブ・ケイパビリティ: 答えの出ない事態に耐える力』



帚木蓬生著 朝日新聞出版 2017年
(5階C:通常書架 493/7/467)
人間科学部 心理学科 3年
半田 乃音

ネガティブ・ケイパビリティという言葉をご存じでしょうか。ネガティブ・ケイパビリティ(negative capability)を一言でいうと「答えの出ない事態に耐える力」です。反対にポジティブ・ケイパビリティという言葉もあります。これは問題を迅速に解決する能力を意味します。現代では早く白黒つける方が好まれています。しかし白と黒の間に存在するグレーの中にとどまり、そこでしか味わえない時間に身を置く能力も同じように大切だと思います。その時間は不安定であるかもしれませんが、今まで無視していたあるいは切り捨てていた意味や価値を見出すことができると思います。

大学生活は不安や悩みでいっぱいです。すぐに答えを出す必要はありません。「できる、できない」「する、しない」の二者一択の思考を止めて二択の間には何があるだろうかと考えてみてください。二つの対極的な選択肢の間には無数の選択肢が広がっています。その無数の選択肢を探究する力がネガティブ・ケイパビリティです。

人生は階段を一段ずつ上がっていくようなものだと言いますよね。理想とする自分や自分の望む目標が階段の頂点にあります。早く正解をだしたり、何らかの成果を獲得したりしたときだけ階段をあがるわけではありません。グレーの中に留まりながら自分にできることを考え、取り組み続けたプロセスにも意味や価値があり、その積み重ねによって階段を上がっていくと思います。

これからの4年間のお守りとして、是非本書を読んでみて下さい。

『流浪の月』



凪良ゆう著 東京創元社 2019年
(1階E,F:ブックツリー内外(ベストセラーズ) 913/6N26/2)
国際文化学部 国際文化学科 2年
中村 心奏

「ある青年が女子小学生を誘拐しました。」このニュースを聞いて、あなたは何を思いますか。「大変だ、女の子を救わないと。」「少女の精神状態が心配だ。」「親はさぞ苦しい思いをしているだろう。」こんなことがきっと頭をよぎると思います。

「流浪の月」はこのニュースの当事者である誘拐犯の文と少女の更紗の半生が描かれた物語です。誘拐によって始まった二人の生活は私たちの心配とは裏腹に、明るく開放的で事件以前の生活よりも人間らしいものでした。彼らにとって文を罵倒する声も、更紗を心配する声も耐え難いものなのです。

私たちは、テレビやSNS等でしか情報を得ることができません。事実と真実は違います。私たちがそれらの画面や紙面から捉えた事実は、必ずしも真実であるとは限りません。物事の表面だけを見てその背景すべてを理解した気になることは、世界にいる誰かを深く傷つけうるとても恐ろしい行為だと、この物語は教えてくれます。大学生になると関わる人も増え、世界が広がります。様々なニュースや身の回りの出来事に潜む真実を見逃さないように、一人でも多く悲しむ人の声に気づけるように、皆さんの心のお守りになってくれる本です。ぜひ、読んでみてください。

世界の図書館 Library

[釜山大学図書館編]



（大韓民国／釜山広域市 釜山大学校図書館）

Address: 2, Busandaehak-ro 63beon-gil, Geumjeong-gu, Busan, 46241, Rep. of KOREA
https://lib.pusan.ac.kr/

国際文化学部 国際文化学科 教授 尹 芝惠

釜山大学（Pusan National University）は、韓国第2の都市・釜山に位置する国立総合大学であり、釜山・梁山・密陽の三つのキャンパスに広がる大規模総合大学である。広大なキャンパスとともに、図書館群も各学部・研究科の専門性に応じて分散配置されており、大学全体の蔵書は約209万冊、学術雑誌5万種以上、電子書籍約3万タイトルを擁する。北朝鮮資料室や古典資料室といった専門的コレクションも整備され、韓国研究の重要な知的基盤を形成している。

在外研究中の拠点である釜山キャンパスでは、中央図書館［写真1］とセビョクボル図書館（「夜明けの野原」の意）［写真4］という性格の異なる二つの図書館を日常的に利用している。中央図書館は研究図書館［写真2］としての中枢機能を担い、人文社会系から理工系、語学文学系まで分野別資料室が体系的に整備されている。韓国語資料に加え、英語・日本語・中国語の学術書や雑誌も豊富で、博士論文や政府刊行物、デジタルアーカイブなど研究者にとって不可欠な資源が一体的に提供されている。


［写真1 中央図書館外観］


［写真2 中央図書館内部］

一方、セビョクボル図書館は学習専用施設［写真3］として設計され、24時間開放されているスペースもある。深夜でも多くの学生が静かに机に向かう光景は印象的であり、図書館が学習文化の中心的空間となっていることを実感する。日本の大学図書館では研究資料閲覧機能が中心で、学習は学内外の多様なスペースに分散する傾向があるが、韓国では図書館が「勉強する場」として強い社会的意味を持っている点が興味深い。

図書館サービスのデジタル化も際立っている。学生証・職員証はモバイル化され、入館、座席予約、資料貸出などの手続きはすべてスマートフォンのアプリで管理される。筆者も新しいスマートフォン端末を導入し、大学のデジタル環境に適応することで、ようやく「釜山大学の研究者の一員になった」という感覚を得た。


［写真3 セビョクボル図書館内部］


［写真4 セビョクボル図書館外観］

筆者の研究分野である朝鮮通信使および日韓交流史研究においても、中央図書館の日本関係資料や電子史料は不可欠である。歴史的に日本との交流の玄関口であった釜山の地で史資料に触れることは、書物の上だけでは得られない臨場感をもたらし、研究の視野を新たにする経験となっている。

研究支援の中核である中央図書館と、学習文化を体現するセビョクボル図書館という二つの空間は、異なる役割を担いながら釜山大学校の教育・研究活動を支えている。図書館という空間の多様な機能と文化的意味を体感することは、日本の大学図書館のあり方を考え直す契機ともなっている。

ブラウジングルーム

税とはどんなものかしら

法学部法律学科 准教授　住永 佳奈

モーツァルトが作曲したオペラ「フィガロの結婚」に、「恋とはどんなものかしら」というアリアがあるが、私は租税法を担当しているので、ゼミはいつも「税とはどのようなものだろうか」と問いかけることから始める。法令や判例を学んで「答え」を知ってしまう前に、率直な印象を言葉にしてほしいという思いからだ。この問いに対して、受講者は実に多彩なコメントを返してくれるので、ゼミの初回は私の最も好きな授業のひとつである。本欄を読んでいるあなたは、税にどのようなイメージをお持ちだろうか。

世間では、金融所得課税の強化や消費税率の引下げといった、税率の変更による増税・減税の形で税が議論されることが多い。しかし、税率を上げても税収が上がるとは限らない。十分の一税（得たものの十分の一を納付する税）から仮想通貨取引に対する課税まで、古今東西の税にまつわる様々なエピソードを取り上げるドミニク・フリスビー（中島由華・訳）『税金の世界史』（河出書房新社、2021年）は、イスラム帝国の例を挙げて、高い税率は納税者の反乱や逃亡、意欲低下を招き、結果として税収の減少をもたらしうることを紹介する。

同様の現象は、今日でも、そして、より大規模に生じている。リモートワークの普及や情報技術の発展を背景に、人々は自分に有利な税負担を求めて、国家を越えて移住するようになった。国家も、税制優遇措置を用意して富裕層や高所得労働者を呼び込んでいる。国家間で、税のある種の奪い合いが生じているのだ。もっとも、大多数の人々にとっては、税負担ゆえに行動を大きく変えることは容易ではない。例えば、消費税の負担が重いからといって、お米などの生活必需品をまったく買わないわけにはいかないだろう。税収が下がると、公共サービスの提供に影響が生じる可能性もある。果たして、どのような税のあり方が望ましいのだろうか。



『税金の世界史』

本書には、「文明の形は税制によってつくられる。国家の運命―人びとが豊かになるか貧しくなるか、自由な立場を得るか隷属的な立場を得るか、幸せになるかみじめになるか―の大部分は税制によって決まるのだ」という記述がある（27頁）。故きを温ねることは、これからの社会を考えることにつながる。学生の皆さんの多くにとっては、就職して給与明細を見るときが税との本格的な出会いになるだろう。そのときには、どうか税の来し方と行く末に少しだけ思いを馳せてほしい。

ドミニク・フリスビー（中島由華・訳）『税金の世界史』河出書房新社、2021年
［5階 B：通常書架345/2/13］

university　　high school

News

本でつながる大学生×高校生
-LILA主催「語ろう！イチ押しの本-ビブリオバトル-」を実施しました！



2022年の末に発足した、図書館学生団体LILA（リラ）。

2025年12月に、LILAが初めて主催する大学生×高校生イベント「語ろう！イチ押しの本ービブリオバトルー」を実施しました！

イチ押しの本を紹介し、投票によってチャンプ本（最も読みたい本）を決める、図書館では“あるある”のビブリオバトル。今回は、「本や図書館を起点に交流の輪が広がるイベント」をテーマに、近隣の高校生を招いて交流プログラムも組み込みました。

前半は、メイン企画のビブリオバトル。大学生5名が熱意あふれる発表を行い、質問タイムでは高校生からも次々と手が挙がり、会場は活気ある空気に満ちていました。発表終了後に参加者全員で投票を済ませ、結果は最後のお楽しみ…！

後半は、ライブラリーカフェのドリンクを片手に交流タイム。大学生活について、高校生からの質問をきっかけに会話が弾みました。また「新しい本との出会い」をテーマに、OPACで見つけた本を大学生と一緒に書架まで探しに行く体験型プログラムも実施しました。

そして、最後に結果発表！チャンプ本が発表され、優勝者を含む発表者5名に図書館長から賞状と賞品（図書カード）が贈られました。記念写真を撮影し、名残惜しさを感じつつ、イベントは終了しました。

本や図書館を通して交流が広がることを願い、準備を重ねてきた初めてのイベントは、LILAメンバーにとっても、大きな成長と達成感を得る機会になったようです。参加してくださった学生の皆さん、近隣の高校生の皆さん、ありがとうございました！今後のLILAの活動にも、ぜひご注目ください♪





『日本誌』

Histoire naturelle, civile, et ecclesiastique de l'Empire du Japon [博物館配架]

西南学院大学博物館 学芸研究員
鬼束 芽依

大学生になったら、海外に行って現地の言語・文化・歴史などを学んでみたい。現地の人々と交流してみたい・・・そう考えて西南学院大学に入学した方も多いのではないだろうか。今回紹介する『日本誌』の作者ケンペル（Engelbert Kaempfer, 1651-1715）も、時代と立場は異なれど、同じような志と期待を持って日本に向かったのだろう。

ケンペルはドイツに生まれ、1690年（元禄3）から約2年間、出島オランダ商館の商館医として日本に滞在した医師・博物学者である。ケンペルが収集した日本の情報・資料に基づいて刊行された『日本誌』は、ヨーロッパで初めて日本についての詳細を紹介した書籍として知られている。具体的には、地理、起源、気候・風土・自然、政治、神話と天皇制、歴史、宗教、長崎の行政や貿易制度などが取り上げられている。また、二度の江戸参府の旅行記と、付録として茶、製紙業、鍼や灸、鎖国に関する論文が掲載されている。本書ははじめロンドンで英語版が刊行され、続いてフランス語版・オランダ語版が刊行された。特にフランス語版は、モンテスキューやルソー、カントなどの名だたる哲学者や詩人らに活用された。西南学院大学図書館には、フランス語版（1729年刊）が収蔵されている。

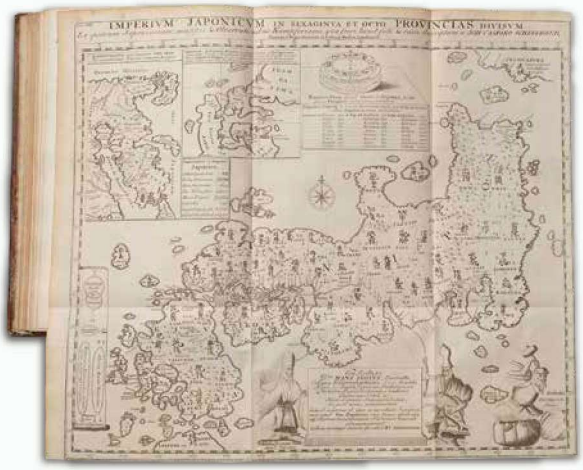
ケンペルは15歳から30歳までドイツ、プロイセン、ポーランドの様々な学校や大学で哲学・歴史・言語などを学んだ。31歳の時にスウェーデン公使館の書記官に抜擢され、ストックホルムからペルシア（イラン）へ派遣される使節団に加わり、交易交渉に携わった。その仕事を終えた後、ドイツには戻らず、エスファハーン（サファヴィー朝の首都）にあったオランダ東インド会社の商館で外科医として勤務し始めた。1688年にはバタヴィア（インドネシア）に移動し、翌年日本へ商館医として派遣されることが決定した。ストックホルムを出て以降、訪れた様々な都市の詳細な記録を取って研究していたケンペルは、同様に日本研究を志してバタヴィアを出港した。しかし、出島に滞在していた商館員たちは、通常出島の外に出ることができなかった。さらに、ケンペルは日本語が話せなかった。そのような環境で、どのように日本研究をおこなったのだろうか。

ケンペルは、日本人が海外の歴史・文化・学問に強い関心を持っていることを見抜き、役人や通詞（つうじ）たちに西洋の学術知識を無償で教えた。その代わりに日本の情報を得たのである。また、ケンペルの世話をしていた阿蘭陀通詞（おらんだつうじ）・今村源右衛門に徹底的にオランダ語を教え、スムーズな意思疎通をはかった。あわせて、薬学や博物学の知識を教えた。源右衛門はその見返りとして、国外に流出してはならないはずの書籍や地図などを提供した。その一部は『日本誌』に引用されている。

さらには、2年間という短い滞在期間に二度もオランダ商館長の江戸参府に随行し、自身の目で日本を観察する機会を得た。『日本誌』に収録された旅行記には、長崎から江戸までの道中で見聞きした様々な事物が記されており、現代の私たちにとっても江戸時代の日本の一端を知る手掛かりになる。大学図書館には日本語訳版も収蔵されているので、ぜひ手に取ってみて欲しい。

ケンペルは日本の政治体制や鎖国制度、勤勉で礼儀正しい日本人の国民性を高く評価した。一方で、名誉を守ることや責任を取るための自害の文化があること、戦争で名誉を得るためであれば危険を顧みないことも紹介し、人生を軽視していると批判した。これらの精神観が、明治時代以降に軍国主義へ組み込まれてしまったことを考えると、鋭い指摘のように思える。

近年、インターネットやAIの発達によって、あらゆる情報を片手で手に入れることが出来る時代となった。しかし、ケンペルの生涯と『日本誌』を辿ると、自らの体験をもって「学び」を得ることの大切さに気付かされる。



【図1】「68州に区分された日本帝国図」当時の日本地図を参照して製作された。

【参考文献】

エンゲルベルト・ケンペル著、今井正編訳　2001『［新版］改訂・増補　日本誌：日本の歴史と紀行』古典叢書6、霞ケ関出版

リチャード・ジップル　1998「他世界のイメージ――エンゲルベルト・ケンペルの日本観と本田利明のヨーロッパ観について――」『南山大学ヨーロッパ研究センター報』第4号、19～31頁

宮崎克則、福岡アーカイブ研究会編　2009『ケンペルやシーボルトたちが見た九州、そしてニッポン』　海鳥社

編集後記

春を迎えました。あたたかな気候でほのぼのしたくなりますが、4月は1年で最も変化の多いタイミング。少し疲れが溜まりやすい時期かもしれません。節目に気合いを入れることは素晴らしいことですが、普段通りのあなたのペースも大切にしてくださいね。

節目と言えば、図書館報は次号で200号を迎えます。気合いを入れてスペシャルな号にするのか、あえて普段通りの構成とするか…これからじっくり考えたいと思います。

春の日差しを感じながら、図書館でゆっくり読書はいかがでしょう？

ご来館、心よりお待ちしています。　(T.S)

西南学院大学図書館報 No.199

2026年4月1日発行
編集 図書館報編集委員会
発行 西南学院大学図書館
〒814-8511 福岡市早良区西新6丁目2番92号
Email lib-jm@seinan-gu.ac.jp
https://opac.seinan-gu.ac.jp/library/
図書館報バックナンバーも上記サイトに掲載しています。

西南学院大学